



# 「初めての表彰状」

星槎国際高等学校  
原 彩子 先生

## 「おれ、生きてきて初めて表彰状みたいなやつ貰ったよ！」

私が今でも忘れられない言葉です。

私が日本語検定を始めたのは、もう10年以上前のことです。色々な事情により不登校を経験した生徒が多く通う本校は、敬語を理解している生徒が少なく、社会に出るには！！と全国の校舎で始めたことがきっかけでした。

私が小学校の頃に習った敬語の記憶は、「へりくだる」という言葉のイメージが多くを占めます。教科書に載っていたので、先生はしっかりとご説明くださっていたのですが、私は尊敬語と謙譲語の違いが当時ちんぷんかんぷんでした。特に「へりくだる」という意味が感覚的に掴めず、四苦八苦したことを今でも思い出します。

だからこそ、生徒たちに『日本語検定』を通して敬語を教えるときにまず考えたことは、『尊敬語』と『謙譲語』の違いを身近な出来事を通して学ばせるということでした。多分「へりくだる」という言葉を耳にしたことのない生徒が半数以上だと考えたからです。不登校を長く経験した生徒は、中学校の部活動も参加していないので、上下関係にかなり乏しいという現状も見えました。

私は、職員室の先生たちやドラマ、自分の大学時代の経験を元にロールプレイング風の説明を多く授業に取り入れました。できるだけ状況がイメージしやすいようにと考えたからです。

最初は、『検定』と名のつくものは「難しいから面倒」と決め付けていた生徒も、徐々に「その場面、バイト

であった」や「先輩に、そういえば怒られた」など、授業に入り込むようになりました。テキストも選択方式なので、取り組みやすかったのかもしれませんが、ドラマを見ていて、言葉の間違いに気づき、報告してきた生徒もいました。

そのような授業を経て、いざ、検定本番です。しっかりと勉強してから受検させたいと考えていたので、11月にある第2回目を選びました。全校受検なので、「なんだ、あいつ。真面目ぶって、検定なんて受けちゃってさ」などと思われる心配もありません。何も気にせず、全員が検定に臨むことができました。

そして1か月後、結果の封筒を一人ひとりに手渡ししました。『親展』って書いてあるのは、本人以外は開けないことになっているんだ。だから、先生もまだ結果は分かりません。さあ、みんな結果を開けて見よう」と声かけをしながらです。すると、1人の生徒から「やばい！ 表彰状みたいなやつ、生まれて初めて貰った！」と歓喜の声があがりました。「俺は、自分が馬鹿だから、こういうのは一生無理だと思ってた」とその生徒が言うので、「いやいや、やればできるし、ちゃんと結果も出たじゃん！ 帰ってお母さんに見せたらいいよ」と返しました。すると「わかった！ すぐ見せる！」と飛ぶように帰宅していきました。

勉強に自信を持ってない生徒はたくさんいます。けれど、何かをきっかけにして自信を取り戻して欲しいと常に思っているのが教師です。その足がかりになるのが「日本語検定」だと私は感じています。「身近なことから、生きる自信を」そんな言葉を胸に、私は今日も指導に勤しむのです。